

大学人のキャリア・パターンに関する国際比較研究(1)

—世界の学界の中心地とその特質—

有 本 章 (大阪教育大学)

I 研究意図

T. Parsonsは大学の中核価値を「認知的合理性」(Cognitive rationality)におき、それとかわって、研究、一般教育、専門教育、社会批判、社会選抜、などの機能分化を認めている。大学人(Academic Profession, Home Academics)は認知的合理性の中心となる知識の生産、伝授、活用にかかわり、純粋研究をはじめ、学部生や大学院生に対する教育、社会の問題解決への貢献、あるいは学生の選抜や評価にたずさわっていることになる。そこでは、研究者、科学者、教育者、知識人、管理者などの多様な役割の遂行がみられるのである。このように大学人の社会的機能や役割は、認知的合理性の理論枠に限定してみても、すでにかんがりの多様性を有している。しかも加えて、これらの機能のあり方は、大学社会の規範構造、制度、組織、個々の大学人の特性などの諸要因の組合せによって複雑に変容せざるを得ない。したがって現代の大学人の研究においては、大学人の「職業的発達」(Professional development)ないし「職業的社会化」(Professional socialization)の実態を個々の大学社会のあいだで比較考察し、大学人と諸機能の関係の力学を究明する必要があるだろう。

ところで「科学社会=学界」(scientific community)は、大学の研究機能に焦点づけ、研究者、科学者としての大学人を扱う場合に大学社会と密接不可分の研究対象となる。「高等教育の社会学」における主要な関心が「大学社会」に向けられると同時に「科学社会」ないし「学界」に向けられる理由がそこにあるし、「科学社会学」(sociology of science)のアプローチが可能になるであろう。

科学社会学の視座から上述の大学人の「職業的社会化」の研究と密接にかかわるのは「科学的社会化」(scientific socialization)の研究であると考えられる。科学的社会化を問題にする場合、一般の社会化研究と同様に、科学者の「パーソナリティ体系」、科学社会の「文化体系」や「社会体系」を問題にする必要がある。なぜならば、社会化は科学者のパーソナリティの形成過程であり、科学社会の社会統制によって科学者として選抜され、養成され、同時に内部的に

は科学者として自立した自己像の形成が行なわれる過程であるからであり、この過程は、一方では、科学および科学社会の規範、理念、価値などを包括した文化体系に制約され、他方では、科学者の集団、組織、制度などにおける地位、役割、所属集団、準拠集団、社会関係、社会体制といった社会体系に規制されることになるからである。

科学的社会化研究では、パーソナリティ体系、文化体系、社会体系の側面における問題が集約され、社会統制と社会化の関係の力学ができるだけ客観的かつ実証的に考察されるような方法が必要であるが、ここで採用する「経歴型」(career pattern)の研究はその一つの試みである。いうまでもなく、科学社会ないし学界は、科学や学問の方法論的固有性によって国家社会の制度や境界を超えて国際的に成立する性格を有しているし、その事実も科学や学問の発展が、このような「普遍主義」(universalism)の原理の作用を無視しては成立しないこととみれば自明であろう。経歴型による科学的社会化の研究は、そのような学界の性格を実証すると同時に個々の科学者の属性、経歴、意識などを通して、国際的・学際的な下位学界にみられる「特殊主義」(particularism)原理の作用をも実証せんとする試みである。

本研究は上述の問題意識から、大学社会や科学社会にかかわる科学社会学や比較高等教育学の諸理論ならびに経験的研究の成果を踏まえながら、主として次のような問題にアプローチする。①大学人の経歴型を分析することによって、そこに刻印された各国における大学人の社会統制と社会化の実態を明らかにすること。②1966年調査と本調査と比較して、15年間に生じた各国における大学人の経歴型に関する変化の実態とそこにあらわれた大学社会と科学社会の変化の実態をそれと明らかにすること。さらに、新たに設定した設問を通して③国際的レベルにおける学界の成層構造、各国の学界の特質、日本の学界の評価と問題点、などを明らかにすること。本時の発表は③に關係した部分を中心とする。

II 研究方法

先行の1966年調査を踏襲し、新たに追加した内容を含めた「大学教授の経歴と人事管理に関する国際比

「職質問紙」(Questionnaire for the International Comparison of Career and Personnel Administration of College Professors)を作成した。質問紙は4枚(7頁)からなり、質問項目は、1部「個人の経歴」(personal career)13項目、2部「教授の管理」(administration of professors)6項目、3部「科学社会の評定」(evaluation of the scientific community)から構成されている。
4項目

調査対象は「World of Learning 1981-82」より世界40か国の大学教授2000名を抽出した。サンプル数は、アメリカ500(社会学教授200を含む)、イギリス、フランス、西ドイツ、カナダ、イタリア(以上各200)、その他の諸国(ヨーロッパ248、アジア150、アフリカ30、オセアニア20、南アメリカ52)500とした。質問紙は1981年12月に郵送した。1982年7月末日現在、全体の回収数は34か国334名、回収率は16.7%である。

(表1参照)。表1 サンプル数と回収率

国・地域	国数	サンプル数	回収数	回収率
アメリカ	1	500	98	19.6%
イギリス	1	200	43	21.5
フランス	1	200	21	10.5
西ドイツ	1	200	34	17.0
カナダ	1	200	37	18.5
イタリア	1	200	21	10.5
ヨーロッパ	14	248	52	21.0
(北欧)	4	73	23	31.5
(西欧)	5	99	21	21.2
(東欧)	5	76	8	10.5
アジア	13	150	16	10.7
オセアニア	2	20	4	20.0
アフリカ	2	30	6	20.0
南アメリカ	3	52	2	3.8
計	40	2000	334	16.7

III 結果の考察
学界は、科学知識の生産と消費にかかわる科学者集団の世界であるから、すでに褒賞体系、引用、コミュニケーション・ネットワークなどに関する科学社会学の先行研究でも指摘されているように、社会階層の構造が存在し、エリート科学者を頂点とした「見えざる大学」(invisible college)や「マタイ効果」の作用が認められる。それは国際的学界でも国内的学界でもさまざまな個別専門分野の学界でも必ずする社会的現象である。その客観的事実を知る一つの方法は、ノーベル賞受賞者をはじめとする各種褒賞受賞者数の国際比較、国際的科学的年鑑などの掲載者の分析、学術雑誌における「科学引用索引」(SCI)を使用した引用の研究、といった研究方法によって確認することかできる。同時に、内外の学界で活躍し学界の発展に貢献している個々の科学者が下す「評定」に基づいて、学界の成層を描く作業が有効であろう。また、科学者のパーソナリティ体系の特質を反映させ

ながら科学社会の実態をとらえることが、この種の経歴型を使用した科学的社會化研究の特徴でもある。

我が国におけるこの種の先行研究は、ほとんど見当たらないので、実験的試みの域を出ないかもしれないが、以下の3つの主題に即して回答者の評価に基づいた数量的分析を行なってみよう。

1 世界の学界の中心地——各国の大学人の評定——

延べ2013名の回答者が世界の学界の中心地として1位から10位までの国名を指示して評定した。最低1回以上の指名を受けた国の総数は41か国にのぼる。その中で最も被指名数の多い国はアメリカ(224)である。以下、イギリス(217)、西ドイツ(209)、フランス(205)、日本(188)、ソビエト(152)、カナダ(134)、スウェーデン(114)、イタリア(100)、オランダ(80)、オーストラリア(58)、スイス(57)、などとなる。これをさらに、指名順位の1位に1点、2位に2点、……10位に10点を乗じて計算してみると、アメリカの場合321点となる。これを指名者数224で除すとアメリカの平均得点は、1.43点となる。これは全回答者のあいだでほぼ1位の指名をされていることになる。以下、イギリス(3.02)、西ドイツ(3.38)、フランス(4.34)、日本(4.85)、ソビエト(5.10)、カナダ(6.61)、スウェーデン(6.75)、オランダ(6.97)、オーストリア(7.06)、イタリア(7.10)、フィンランド(7.11)、ノルウェー(7.23)、などとなる。

国別・地域別に同様の計算をすると、国や地域によって自己の国や地域を高く評価する「エスノセントリズム」や国や地域ごとに情報網を形成する「見えざる大学」現象の実態があらわれる。

2 学界の国別階層構造——アメリカの事例——

世界の大学人からきわめて高い割合で1位に指名されているアメリカは国際学界の中心地を形成していると考えられていることに他ならない。その意味からすると、そこでの各専門分野における成層は世界的にも重要な意味を有することになる。そこで、分野別に分析し、成層の特質とセンター形成の条件なりメカニズムなりを究明する必要がある。(以下略)。

3 日本の学界の国際的評価と問題点

本調査では、日本の学界を国際的視点からみると、長所とともに改善すべき問題点や批判の声が寄せられている。日本の学界が世界に開かれるには、これら外国の大学人の声に率直に耳を傾ける必要があるであろう。種々の声を事例的に紹介し、日本の学界のシステムの問題点を考えてみる。(以下略)。